

甦る伝説の投球

ソフトボール

使命の金へ「全集中」

日本ソフトボール界初のメダル獲得となった'00年シドニー五輪（銀）と、2大会連続メダルに輝いた'04年アテネ五輪（銅）で、監督を務めたのが宇津木妙子さんだ。現日本代表の宇津木麗華監督が1995年に中国から日本に帰化する際、「あこがれの選手」として名字をもらった人物であり、日本のエース・上野由岐子を20年以上にわたって指導してきたレジェンドでもある。

ソフトボールが五輪に登場するのは悲願の金メダルに輝いた'08年北京五輪以来、3大会ぶり。宇津木さんは「13年に東京五輪の開催が決まってから、野球・ソフトボールを追加競技に入れてもらった以上は勝たなきゃいけない。このチームに課された使命は金メダルしかありません」と言葉に力を込める。

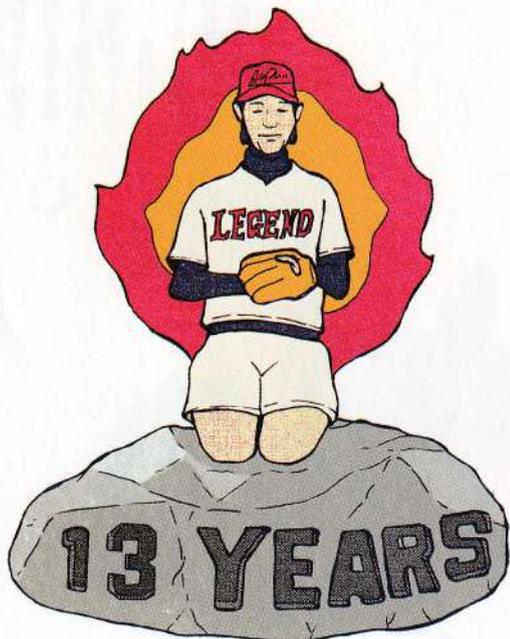
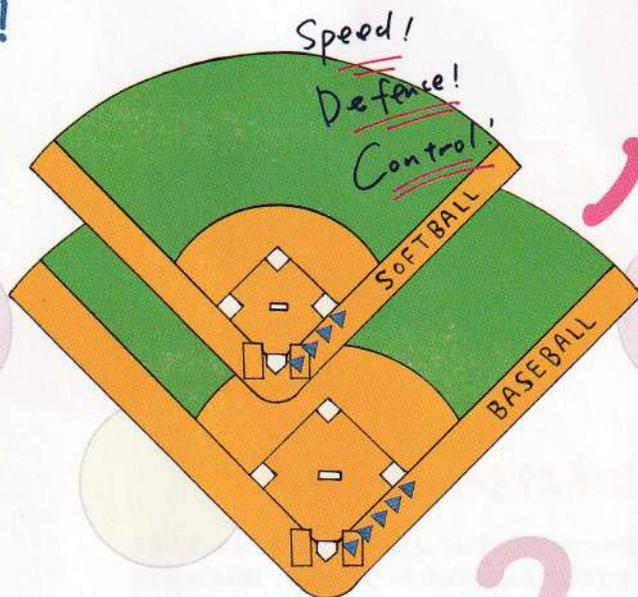
'14年から日本ソフトボール協会副会長として強化に尽力してきた宇津木さんが選手に送るエールは「全集中」。

「7月21日の競技初日（オーストラリア戦）から全員が全集中して戦って、最後に到達するのが金メダル。全員が、世界一のプレーヤーになり、北京五輪の再現となる優勝を全員で勝ち取ってほしい」と、厳しくもやさしい視線を注いでいる。

1 野球とどう違う？ これがソフトの醍醐味だ！

基本的なルールは野球とほぼ一緒ですが、一番の違いは投手が下手投げであること。そして、マウンドとホーム間の距離が女子は43フィート（13・11m）と短く、独特のスピード感があることです。世界には上野由岐子をはじめ、120km近い速球を投げる投手がいるので、体感速度は野球以上です。塁間も短いので、ファンブルしたら全部セーフ。ですから完璧な守りが必要です。

それと、私が考える醍醐味は、選手に多様性があることです。体の大きい選手もいれば小さい選手もいるのがソフトボール。選手の個性や特長に合わせて、走るのが速ければ走ることもできるし、太っちょさんも長打を打てればそれが生かされるし、細かいプレーが得意な選手もいる。どんな体格の選手でもそれぞれのポジションに応じて多岐にわたって生かされるという点で、誰もが参加することができるいいスポーツだなと思っています。



2 3大会ぶりに復活！ 麗華ジャパンはココを見ろ！

ソフトボールは'08年北京五輪以来、3大会13年ぶりの復活。前回、金に輝いた日本は、五輪のなかった期間も継続して代表チームの強化をしてきました。それが他国との違いであり、日本の強みだと思います。戦術面では監督の個性が出ると思います。私が監督として指揮を執った'00年シドニー五輪と'04年アテネ五輪の時は、まず守りから入り、投手の制球力で打たせて取る、それに徹したチーム作りをしてきました。対照的に麗華ジャパンの見どころは、現役時代に彼女自身が一発を打てる長距離ヒッターであったことに由来する、打撃中心のダイナミックな采配。五輪本番ではそこに手堅さ加わり、隙のない、緻密な試合運びが見られるのではないかと思います。



講師 宇津木妙子

1953年4月6日、埼玉県生まれ。五輪では監督としてシドニー、アテネ、メダルに導く。日本人女性初の国際ソフト連盟設立入り

4 "因縁の"アメリカとの対戦に注目!



Takuya Sugiyama/JMPA

アメリカはソフトボールが正式種目になった'96年アトランタ五輪から'04年アテネ五輪まで3連覇を果たし、世界選手権では最多の11度優勝を誇る強豪国。日本とは長い間、ライバル関係にあります。シドニー五輪の時は、リーグ戦では日本が勝ったものの、決勝では惜敗。'08年北京五輪では日本はリーグ戦とベージュシステムの初戦で敗れましたが決勝では勝利を収めて金メダルでした。今回のアメリカは北京五輪を踏まえて日本を徹底的に分析してくるはず。

3 参加チームが6カ国に減ってメダルに向けて"取りこぼせない"



参加チーム数は従来の8カ国から6カ国になりました。それに伴って敗者復活戦のあるベージュシステムがなくなり、ダブルヘッダーの可能性もなくなったのが大きな変更点です。今回はまず6カ国総当たりのリーグ戦を行ない、1、2位が決勝戦、3、4位が3位決定戦へ進みます。つまり、リーグ戦2位以内にならないと金メダルは不可能。北京からの連覇を至上命題とする日本にとっては、取りこぼしの許されない、初戦から重圧のかかる大会方式です。

この選手から目を離さない!



上野由岐子 (日本)

日本が誇る大エース右腕。北京五輪で日本を金に導いた「413球」は伝説。麗華監督からの信頼も絶大で、負けん気の強さも健在だ



山田恵里 (日本)

上野と同様に'04年アテネ五輪から3大会連続のレジェンド外野手。自分が一番という自負を胸に秘め、今回は主将として連覇を狙う



山本優 (日本)

パワフルな打撃が魅力の主砲。右投げ右打ち。昔ながらの泥臭いハッスルプレーや、喜怒哀楽をはっきりと出す性格ムードメーカーに



キャット・オスターマン (アメリカ)

天下一品のドロップを最大の武器とする左腕投手。球速は105km前後だが、大谷翔平に匹敵する変化球の制球力で打者を打ち取る



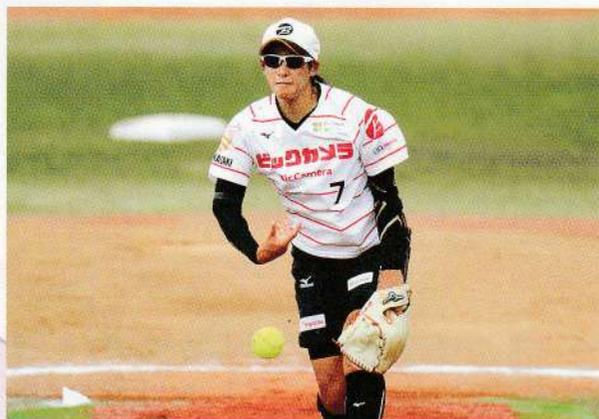
ステージー・ポーター (オーストラリア)

'08年から佐川急便でプレーする右投げ右打ちの長距離ヒッター。走攻守に優れ、日本選手を熟知している。闘争心あふれる選手だ



ダラス・エスコベド (メキシコ)

今大会のダークホース国の右腕エース。武器はドロップ。昨季から豊田自動織機に所属しほぼ全試合完投。スタミナと安定感が光る



AFLC

5 "テンポラリーランナー"導入で打順の戦略も変わってくる?

ルールで変わったのは「テンポラリーランナー」の導入。2アウトで捕手が塁上にいる場合に、ランナーを捕手の前の打者へ交代できるようになったので、捕手の前の打順には足の速い選手を置くなど、戦略も変わってきています。また、投手は両足をプレートにつけていなければならなかったのが、軸足でない足(自由足)を後方に置くことができるようになり、格段に変化球が進化しました。今では野球に匹敵するくらいで、ドロップ、ライズ、カーブ、シュート、チェンジアップと、多岐にわたっています。